

第9回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール

優 秀 賞

実践報告部門

**地理的・歴史的分野に取り入れた
経済・金融教育の実践について**

京都府・京都市立伏見中学校 教諭 奥村 光太郎

知るぽると
www.shiruporuto.jp

© 金融広報中央委員会 2012

1. はじめに

中学校社会科における「経済教育」や「金融教育」は、一般に3年生で行われている。学習指導要領を「表面的に」見ると、1～2年生で地理的分野と歴史的分野を並行して指導し、3年生の公民的分野ではじめて経済や金融の仕組みを教えるという構成になっているからである（ただし平成24年度より3年生の授業時数が週1時間増加したため、歴史的分野の一部が3年生に持ち越されるようになった）。

学習指導要領では「経済」という語句は公民的分野でのみ使用されている。それは公民的分野の「2 内容」の「(2) 私たちと経済」の部分である（もちろん、この項目に関連した「3 内容の取り扱い」の中でも記述されている）。しかし経済や金融の学習を公民的分野だけで行うと限定してよいのだろうか。地理的分野や歴史的分野の教科書をみると、経済・金融教育に適した題材が多数含まれている。これを活用すれば、地理的・歴史的分野の授業の中で経済や金融に関する学習の素地を育てることができる。そしてそのような素地があれば、3年生での経済・金融にかかわる授業が円滑に進むと考えられるのである。学習指導要領の「内容の取り扱い」を見ると、地理的分野・歴史的分野のどちらにも「公民的分野との関連にも配慮すること」という記述がある。また、地理的分野で経済や金融と関連する内容を探すと、「資源・エネルギー」「物流」「生活や産業」といったキーワードや「日本や世界の諸地域を比較し関連付けて考察し、それらの地域は相互に関係し合っている（中略）ことを理解させる」という記述を見つけることができる。歴史的分野では「日明貿易」「産業の発達」「オランダ、中国との交易」「産業革命」「殖産興業」など、経済的な視点を含めて指導することが望ましいキーワードを多数見出すことができる。つまり地理的分野でも歴史的分野でも経済的な視点をもって学習を展開することは十分可能なのである。筆者はこれまで地理的・歴史的分野の学習の中に経済単元を意図した内容を積極的に導入してきた。そして公民的分野の指導に進んだ時にはその大きな効果を実感してきた。そのような実績を踏まえて、筆者の実践を紹介したいと考える。

2. 指導における基本的な理念

筆者は、経済・金融教育の本質は「分業と交換の仕組みをどのように理解させるのか」ということに尽きると考えている。「分業と交換」というと物質的な側面ばかりが連想されるが、決してそれだけではない。例えば「労働」は労働力を労働市場で売買するという面からとらえることができる。船員・会社員・医師・弁護士といった様々な職業の存在は、「労働」を分業としてとらえることが可能であることを示している。「金融」は現在の貨幣を利子を付した将来の貨幣と交換するということである。また、いわゆる「悪質商法」を「分業と交換」の観点から考察すれば大変不合理であり、あり得ない仕組みであるということが理解できる。このように、「分業と交換」の概念には大変な重みがあり、地理的・歴史的分野を学ぶ早い時期から馴染んでおくことは、経済的なセンスを育む上で極めて有用なのである。

3年生で学ぶ公民的分野のキーワードは「対立と合意」「効率と公正」である。これらのキーワードを地理や歴史を踏まえた経済や金融の学習にあてはめると次のようになる。

人類は歴史が始まって以来、より公正で効率的な分業と交換の仕組みを追求してきた。そこでは個人間・民族間・地域間・国家間などにおける様々な対立を調整し、合意に持ち込むために懸命な努力が続けられてきたと考えられる。一例をあげるならば、物々交換に始まる「交換の仕組み」や貨幣につながる一般的な価値尺度を考案してきたということである。地理的な側面から見ると、例えば他地域とより有利な条件で交換するために自分が生活している地域の特性に合わせた天然資源や農産物を生産してきたということである。筆者は地理的・歴史的分野の指導の中にこのような「分業と交換」という視点を融合させ、できるだけ自然な形で理解がすすむように工夫してきた。これが本実践を行ってきた筆者の理念である。

本実践報告（指導計画を含む）において準拠した教科書は次の通りである。

- 地理的分野：帝国書院「社会科 中学生の地理 世界のすがたと日本の国土」平成24年1月20日発行
 - 歴史的分野：日本文教出版「中学社会 歴史的分野」平成24年2月8日発行
 - 公民的分野：日本文教出版「中学社会 公民的分野」平成24年2月8日発行
- 以下、本報告では「地理教科書」「歴史教科書」「公民教科書」と表示する。

3. 指導内容

繰り返しになるが、筆者は経済・金融教育の要点は「分業と交換」の指導にあると考えている。ここで筆者が地理的分野・歴史的分野において「分業と交換」をどのように指導してきたのかを説明したい。詳しい指導内容については資料「指導計画書」において説明する。なお、ページ数の制約により、すべてを紹介できなかったことをお詫きしたい。

(1) 地理的分野

筆者が地理的分野において指導した内容は例えば次のようなものである。

①市場原理に基づく分業と交換の様子

私たちの身の回りにある繊維製品や日用雑貨の多くは外国製品である。これは日本よりも人件費をはじめとする生産コストが大幅に安い国があり、日本製の商品よりも安価に生産し、販売できるからである。技術的には日本でも生産できるが価格ははるかに高くなる。消費者がどこの国の商品であってもより安いものを選択するのは市場の原理であり、このことから国際分業が成り立つのである。

②地域の特性による分業と交換の様子

北海道は亜寒帯気候区に属している。したがって、てんさいなど本州とは異なる農産物を生産することができる。また広い耕地を確保しやすいため、大規模で効率的な農業経営を行うことができる。航空機等、輸送手段の発達も生産の幅を広げることに役立っている。このように、地域の特性を利用した分業と交換を行うことにより、より多くの利益を追求することが可能になるのである。

(2) 歴史的分野

筆者は歴史的分野において多くの題材を取り上げた。そこで、ここではまず内容項目を列記し、その中から特に重点をおいて指導したものについて説明することとする。

(a) 内容項目

- ①物々交換のはじまり
- ②市場のはじまり・・・「交換の場」の成立
- ③分業のはじまり・・・狩猟採集生活、農業、家内工業、問屋制家内工業、工場制手工業、工場制機械工業（産業革命以後）
- ④政府の関与
- ⑤交換手段の発達
- ⑥貨幣の出現
- ⑦分業と交換を円滑に進める産業の出現・・・金融業などの出現

(b) 特に重点をおいて指導した内容

●自給自足の経済

人類が誕生した当初は「自給自足経済」であったと考えられる。この時代は、生きるために必要なものは自分あるいは家族的なつながりの中で調達するしかなかったのである。しかし自給自足経済では常に過不足状態が発生する。そこで自分にとって不要なものを提供し、そのかわりに必要なものを手に入れようとする「分業と交換」という考えが生じてきたのである。

●分業体制の進行と物々交換の始まり

分業が本格化すると日々の仕事が専門化されていくことになる。そして農業だけに従事していても、物々交換によって漁業の生産物を入手できるといったように、生活もまた効率化されていくことになる。また、物々交換が活発化し始めると、交換を公正かつ効率的に行うための手段が求められてくる。この時代の指導の重点をまとめると、分業による生産の効率化は、手元にある余剰生産物を、自分にとって不足しているものを所有している人と交換することから始まったということである。当時の人たちは価値の等価交換というものに苦心していたと考えられる。ここから価値尺度となる「貨幣」の必要性が求められるようになったのである。

4. 取り組みの成果

地理的・歴史的分野で経済・金融教育を含んだ指導を行っておくと、3年生の公民的分野の指導の中で「素地が出来上がっている」ということを実感させられる時がある。それは次のような事例に出会った時である。

- ①いわゆる「悪質商法」の指導の中で「マルチ取引」について説明した。生徒達は口々に「そのような仕組みはマーケットとして不自然であり、存在不可能です」ということを指摘した。生徒達は市場原理という側面からマルチ商法の不公正な実態を簡単に見抜いたのである（公民教科書 p.123：図表1*参照）。
- ②需要・供給曲線の指導に際して、全く同じパッケージ旅行でありながら、季節によって大幅に料金が異なる料金カレンダーを提示した。生徒達は即座にカレンダーの連休等に注目し、買い手が多い時には高額となり、少ない時には低額となる需要と供給の関係を正しく説明した（公民教科書 p.128：図表2*参照）。
- ③消費者金融の金利計算を実際に行わせた時のことである。「50万円を年利18%で借りた場合」を計算させたところ、素早く答えを出した生徒から「現在50万円に困っている人が1年後に9万円の利息を上乗せした59万円を返済することは困難と推察される。このような融資の仕組みは、借りる側だけでなく、貸す側にとっても、社会全体にとっても好ましくないと思うのだが、何かいい制度は作れないだろうか」という意見が出された。
この生徒は教科書で説明されている「自己破産」のコラムなども読んで上で危機感をもって意見を述べたのである。

上の三つの事例はほんの一部である。他にも驚かされた事例はたくさんあるが、これは生徒達が地理的・歴史的分野の学習の中で経済・金融教育に関する「素地」を身に付けてきたことも一つの要因ではないかと感じている。これからもこの取り組みを継続させてより多くのデータを収集し、効果について更に詳しく分析したいと考えている。

5. まとめにかえて

今回の実践報告は、1～2年生の授業の中にいわば「溶け込ませる形」で行ったものであり、特設授業は皆無である。社会科には「裁判員制度」「租税教育」「年金教育」「北方領土問題」など実に多くのパンフレット類が送られてくるが、特設して解説するなどということは困難である。それは「経済・金融教育」についても同様である。しかし授業の中に溶け込ませるという形式をとれば、本来の学習に少し手を加えるだけで内容を大幅に充実させ、3年生の公民的分野で学ぶ経済・金融学習につなげることが可能になるのである。本報告は大変乏しい内容であるが、筆者が自らの課題意識に基づいて精一杯取り組んできた金融・経済教育の実践である。多くのご批判をいただいて、さらに発展させたいと思っている。多くのご指導・ご鞭撻を願ってやまない。

資料 指導計画書

(1) 地理的分野指導計画

京都市立伏見中学校

【テーマ地理Ⅰ】なぜ「100円ショップ」の商品は安いのか
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる「100円」ショップで売られている製品の大半は中国など外国製である。 ・同じ種類の商品でも、日本製と比べると大変安いので、私たちは100円ショップで多くの商品を購入している。 ・それでは、なぜ中国では安価に商品を作ることができるのだろうか。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人件費」に注目させる。 ・教科書記載のグラフ「各国の賃金の格差」に注目させる（地理教科書 p.51：図表3*参照）。 ・日本の1ヶ月当たり平均賃金は約29万円であるが、中国は3万円弱なので日本の10分の1ということになる。 ・中国の国民がこの賃金で生活できるということは、その他の資材等についても日本より安価に調達できると考えられる。 ・そこで日本よりも安い価格で製品を製造できるということになる。 ・市場では当然のこととしてより安価な商品やサービスが選好される。 ・このことから、「国際的な分業」として中国で100円ショップの商品が大量に生産され、日本の消費者によって購入されるのである。
【テーマ地理Ⅱ】日本はなぜ大量の農産物を輸入しているのだろうか
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の食料自給率は39%といわれている。つまり日本は多くの農産物を輸入に頼っているのである。 ・このことは、日本は独力で自国の国民に食料を提供できないということを示している。 ・日本のような国が飢えに苦しまないのは、大量の食料品を輸出できる国があるということを示している。 ・このことから「なぜ他国に供給する余裕のある国があるのか」ということと「なぜ日本はこのように大量の食料品を輸入しているのだろうか」という2点を問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書記載の図版「アメリカ合衆国とカナダの農産物の生産量に占める輸出量の割合」（地理教科書 p.84：図表4*参照）、「アメリカ合衆国とカナダのおもな農業地域」（地理教科書 p.85：図表5*参照）、「大規模な牛の飼育場」（地理教科書 p.85：図表6*参照）、「輸出される小麦」（地理教科書 p.85：図表7*参照）、「日本のおもな農産物の輸入先」（地理教科書 p.85：図表8*参照）、「地理のポイント」（地理教科書 p.85：図表9*参照）を利用する。 ・「地理のポイント」には「広い土地で機械を使って大規模に穀物を栽培すると、生産にかかる費用が安くなります。そのため、出荷するさいの価格が低くなり、輸出に有利になります」という記述がある（地理教科書 p.85：図表9*参照）。ここから大規模農業のメリットと日本でなぜ大規模農業が困難なのかを考えさせ、アメリカと比べて国土が狭いということに注目させる。 ・「アメリカ合衆国とカナダのおもな農業地域」「大規模な牛の飼育場」「輸出される小麦」を使用して両国の農業の規模の大きさを実感させる。 ・「アメリカ合衆国とカナダの農産物の生産量に占める輸出量の割合」を利用して両国の輸出余力について説明する。 ・「日本のおもな農産物の輸入先」を利用して、日本の食料は農産物の国際的な分業体制によって支えられていることを理解させる。

【テーマ地理Ⅲ】北海道の農業の特徴を考える
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おもな農産物の生産量に占める北海道の割合」（地理教科書 p.249：図表 10*）を参照させる。 ・すると北海道には生産量が全国一という農産物がたくさんある（てんさい＝100%、あずき＝88.1%など）。 ・ではなぜ北海道には全国一の農産物がたくさんあるのだろうか。その理由を問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真「十勝平野の畑作」（地理教科書 p.252：図表 11*）を参照させる。 ・広大な北海道では、本州と違って大規模な畑をつくることができる。 ・また、気候が亜寒帯なので、「適地適作」という観点からみると温帯である本州とは異なる作物の育成が適している。 ・つまり、やや低い温度に対応できる作物の生産に適しているのである。 ・北海道は日本全体の気候条件にもとづいた分業体制と機械化がすすめやすい広大な畑地があることから全国一の農産物がたくさん作られているのである。

(2) 歴史的分野指導計画

【テーマ歴史Ⅰ】主な作物の原産地とその広がり
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「主な作物の原産地とその広がり」の図（歴史教科書 p.19：図表 12*）を参照させる。 ・この図には「すいか」「さつまいも」「オオムギ」「イネ」などの作物が世界に広がっていった様子が描かれている。 ・それではなぜこのような作物が世界に広がっていったのだろうか。その理由を問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各大陸にわかれて生息している作物が自然の状態では世界に広がっていくことは考えられない。 ・これらの作物は、人間が伝えていったと考えられる。 ・人間は、身近にある交換手段となるものを広く伝えることにより、利益を得ようと試みてきた。 ・人類はまだ文明が十分に発達していなかった頃から世界に交換手段となりうるものを伝えはじめていたと考えられるのである。

【テーマ歴史Ⅱ】「交換手段」の誕生
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・買い物をする時、もし貨幣（お金）というものがなかったらどうなるかを考えさせる。 ・私たちは日常生活に必要なもののほぼ全量を家庭外から買っている。 ・したがって、もし貨幣がなかったら、私たちは明日から生きていけないということにもなりかねない。 ・貨幣が発明された時期と場所、そして考え出されるに至った経過を問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統一的な貨幣の使用は、紀元前 221 年（今から約 2200 年前）に中国の秦において、秦の始皇帝によって始められた（歴史教科書 p.23：図 13* 参照）。 ・貨幣が広く流通するためには、貨幣に「価値の裏付け」が必要である。なぜならば、貨幣と交換対象の物品が同価値であるということが保証されなければならないからである。 ・秦の始皇帝はものさし・ます・はかり・貨幣・文字を統一したが、これは始皇帝が強大な権力をもっていたからである。その権力によって交換価値の同等性が保証されたのである。

<p>【テーマ歴史Ⅲ】 国際的な分業と交換～シルクロードを手がかりに～</p> <p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「分業と交換」が行われる範囲は近隣地域から少しずつ遠くへ拡大していった。 ・そして天平時代、つまり約1200年前にはユーラシア大陸を横切ってアジアとヨーロッパを結ぶまでに広がっていた。 ・このルートをシルクロードといい、その東端は奈良の正倉院であるといわれている。 ・それではシルクロードはなぜ成立したのだろう。また、どのようなものが日本に伝わってきたのだろう。正倉院に残る宝物を手がかりにして考えることを問う。 <p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史教科書 p.42 (図表 14 参照) には正倉院が所蔵する様々な宝物が掲載されている。これらの宝物は中国やインド、西アジアでつくられたものである。 ・このことは、日本にはこれらの品物を制作する技術はなく、輸入していたことを示している。 ・シルクロードは文化の伝達という側面が目されるが、結局これは経済的利益を追求する「分業と交換」を目的としたものである。馬やらくだといった交通手段しかない時代にこれほどのことが行われたということは、そこに莫大な利益を得るチャンスがあったということの意味している。つまり、シルクロードは大きな利益をあげたいという人間の欲望によって支えられていたのである。 ・この当時、シルクロードを経由してこれらの物品が日本にまで届けられるということは、日本が国際分業の仕組みの中に含まれており、高い価値の交換手段をもっていたことを示している。 ・高い価値の交換手段であるが、恐らくこれは「金」であったと推定される。なぜならば「金」はアジアでもヨーロッパでも普遍的な価値をもっており、大仏造営時の様子でわかるように当時の日本には「金」を集める力があつたからである。
<p>【テーマ歴史Ⅳ】 日本の庶民階層における交換手段の発達～鎌倉時代の人々の暮らしを手がかりに～</p> <p>【問い】 鎌倉時代には「貴族」「武士」「農民」の身分はほぼ固定していた。このことは、当時の日本は安定した分業体制と交換手段を成立させていたことを示している。そして分業体制と交換手段が成立していたということは、生産能力も高まっていたと考えられる。当時の分業体制と交換手段と生産の様子はどのようなものであつたのかを問う。</p> <p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「市のにぎわい」(歴史教科書 p.70: 図表 15) を参照させる。 ・市は多くの人でにぎわっており、質的に高い商品が大量に売られていたと推定される。 ・このような市が成立するということは、信用性の高い貨幣があつたということの意味している。 ・「宋銭」(歴史教科書 p.71: 図表 16) から、当時の日本では中国(宋)の貨幣の信用が高かつたことがわかる。 ・「高利貸し」(歴史教科書 p.71: 図表 17*) を参照させる。このことから、当時、いわゆる「金融業」が成立していたことがわかる。
<p>【テーマ歴史Ⅴ】 一つにつながれた世界～大航海時代と日本～</p> <p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15世紀末にコロンブスが西インド諸島に到達した。 ・その後、バスコ＝ダ＝ガマが喜望峰経由で直接インドに行く航路を開いた。 ・その後マゼラン一行が世界一周に成功した。 ・このような航路の開発目的を問う。 ・また、いわゆる「大航海時代」の意義を問う。 <p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この当時、造船技術と航海術が発達し、船舶による海外進出(探検)が盛んになった。 ・その最大の目的はより多くの富を手に入れることであつた。 ・ポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国は未開の地域に進出して大量の銀を持ち帰った。 ・また、アフリカから多くの黒人奴隷が連れ去られた。 ・このことを分業と交換という視点から見ると、世界が一体化して更に次のステージに進化したということになるが、別の面から見ると当時の先進国が当時の発展途上国から不当に収奪を行い、被害を与えたということになる。

【テーマ歴史Ⅵ】小判の改鋳から見える江戸時代の経済
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「小判の重さと質の変化」（歴史教科書 p.132: 図表 18）を参照させる。 ・慶長小判→元禄小判→天保小判→万延小判と小判に含まれる金の含有量が減少していることに注目させる。 ・それでは、なぜ小判の質が低下したのだろうか。また、このことでなぜ物価が高騰したのだろうか。この2点を問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金の含有量が減るということは、小判の価値が減少するということである。 ・例えば、17.9 グラムの慶長小判の金の含有量は約 84%だから、実質 15 グラムの金が含まれているということになる。つまり、この小判で 15 グラムの金に相当するものが買えるということになる。 ・しかし 3.3 グラムの万延小判の金の含有量は約 57%だから、この小判では約 1.88 グラムの金に相当するものしか買えないということになる。 ・したがって、慶長小判なら 1 両で買えるものであっても、万延小判なら 9.5 両なければ買えないということになる。 ・そこで物価が大幅に上昇するということになるのである。

【テーマ歴史Ⅶ】太閤検地は何をもたらしたか
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊臣秀吉は太閤検地を行った。 ・秀吉は全国に役人を派遣して決まったものさしで田畑の面積を測ったのである。「検地に使われたものさしとます」（歴史教科書 p.107: 図表 19）参照。 ・秀吉は検地の結果を検地帳に記録し、年貢を徴収する基本とした。それでは「決まったものさしとます」にはどのような意味があったのかを問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・決められた「ものさし」と「ます」は長さと容積の基準となる。 ・様々な取引は、統一された基準によって行われる必要がある。 ・統一した基準がなければ公正な取引、つまり交換はできないのである。 ・分業と交換を正しくすすめるための基準として、秀吉の定めたものさしとますは大変重要な意味をもっているのである。

【テーマ歴史Ⅷ】イギリスの産業革命の意義について考える
<p>【問い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イギリスの産業革命とはどのようなものであったのかを問う。 ・イギリスの産業革命は世界の歴史にどのような影響をもたらしたかということを問う。
<p>【指導の要点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業革命とは、蒸気機関の発明などによって生産効率が飛躍的に向上し、工場制機械工業によって大量生産が行われるようになり、社会の様子が大きく変化したことをいう。 ・これにより資本家が大きな経済力をもつようになったが、一方で手工業者などが職を失う結果となり、多くの失業者が発生した。 ・失業者の多くは工場に雇われて自己の労働力を貨幣と交換する立場になったが、労働条件は大変厳しかったため労働組合がつくられたりした。 ・産業革命は世界の国々に瞬く間にひろまり、世界全体を大きく変えていく結果となった。

図表 14 紺瑠璃杯(左:高さ 11cm 正倉院宝物)と新羅のガラス製杯(右:高さ約 7cm)



(出所) 歴史教科書

図表 15 市のにぎわい(一遍上人絵伝 神奈川県 清浄光寺〈遊行寺〉蔵)



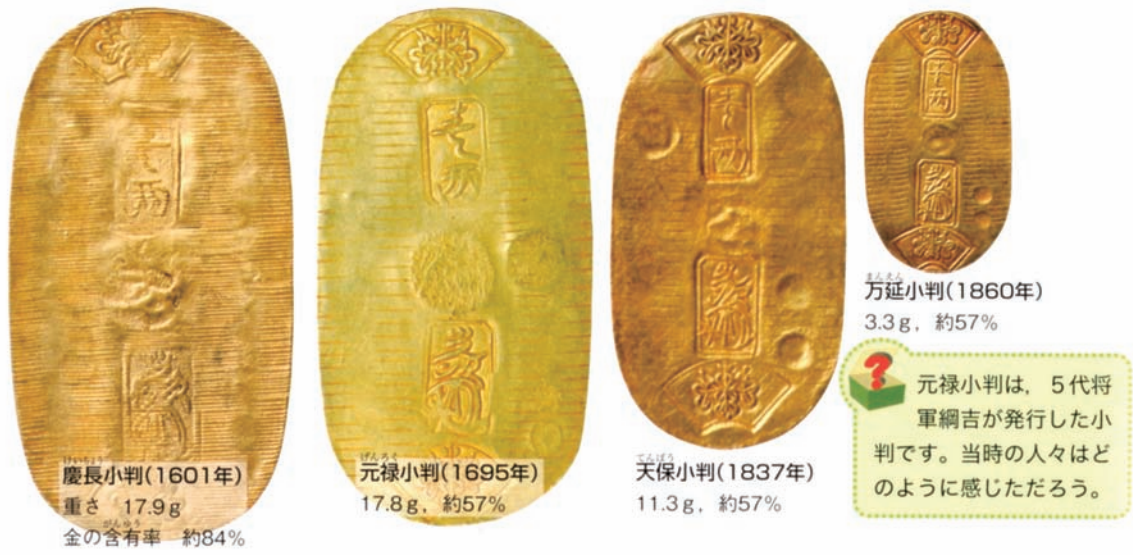
(出所) 歴史教科書

図表 16 宋銭(約24mm 東京都 日本銀行貨幣博物館蔵)



(出所) 歴史教科書

図表 18 小判の重さと質の変化（東京都 日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵）



（出所）歴史教科書

図表 19 検地に使われたものさし* (検地尺) とます (天正枡 芥田家蔵)



（出所）歴史教科書

〈編注〉 *を付した図表については、著作権との関係で表示省略。

〈出所〉

- ・芥田家蔵「検地に使われたます（天正枡）」
- ・宮内庁正倉院「紺瑠璃坏」
- ・日本銀行金融研究所貨幣博物館『新版 貨幣博物館』
URL <http://www.imes.boj.or.jp/cm/collection/tenjizuroku/>
- ・(株) 悠工房「新羅のガラス製杯」、「市のにぎわい」